

英詩人オーデンとベッチマン

W. H. Auden and John Betjeman

木村博雄 Hiroo Kimura

桃の花の咲く開学の時にこの大学に赴任して七年、時間が矢のように過ぎ去るという諺を、今更のように噛みしめております。今日はこのような晴れがましい機会を与えて下さって有難うございます。

私はこれまで現代英詩の流れを追って、ホプキンズ、イエイツ、エズラ・パウンド、T. S. エリオット、オーデン、ディラン・トマスと読んできて、オーデンとの関係からベッチマンに手を染めて、今に至っています。

さて今日取り上げた詩人の一人オーデンはT. S. エリオットの後を承けて1930年代の英国の詩壇に新しい詩風を確立し、同じ傾向の詩人達と共にオーデン・グループと呼ばれました。彼は社会的、心理的傾向の強い詩を書いていましたが、その後も活躍を続け、やがて宗教的なものが加わってきます。

多彩で数多い作品から、この造形芸術の殿堂でお話するのにふさわしいように、芸術に関係するものを二篇選びました。“Musée des Beaux Arts”「美術館」と“The Shield of Achilles”「アキレスの盾」です。

I 「美術館」

「美術館」はベルギーのブリュッセル王立美術館にある、ピーター・ブリューゲルの絵（『イカロスの墜落のある風景』）その他を見たのがきっかけとなって、書かれたといわれています。ローマの詩人ホラティウスは「詩は絵に似ている」（Ut pictura poesis: ...）と言い、プルタルコスによると、もっと昔にシモニデスが「詩はものという絵、絵はもの言わぬ詩」といっているそうです。詩と絵の関係は古来緊密なものと考えられていたのです。中国や日本にもそのような考え方があります。そしてある詩が絵に描かれ、また絵から詩が書かれることもありました。すぐ思い出されるのは、イギリス・ロマン派の詩人キーツの“Ode on a Grecian Urn”です。ギリシアの古い壺に刻まれた絵によせて、芸術の美の永遠性をうたっています。「耳に聞える調べは美しい、が、聞えぬ調べは更に美しい。」（Heard melodies are sweet, but those unheard are sweeter.）ここは絵の中の笛を吹く者に語りかけるところです。この詩はクロード・ロランの絵に触発されて書かれたといわれています。絵から小説の登場人物が着想されることもあります。ヘンリー・

ジェイムズ（最近『ある婦人の肖像』が映画化されました）の『使者たち』の中に出てくる、パリの洗練されたヴィオネ夫人は、ダヴィッド画くところの（『レカミエ夫人の肖像』）、ヴィオネ夫人の魅力にとらえられるチャドは、ティツィアーノの（『手袋を持つ男』）からイメージを得たといわれています。（どちらもルーブル美術館にあります。）

さてイカ罗斯はデザインと絵の天才ダイダロスの子で、父子でミノス王の塔に幽閉されます。父は鳥の羽をろうでつなぎ合わせた翼を作り、父子一緒に飛び出します。イカ罗斯は空を飛ぶ興奮のあまり、父の厳しい注意を忘れ、太陽に近づき過ぎてろうが溶け、翼がばらばらになって墜落して死にます。

ダイダロスの名を自分の作中人物につけたのがジェイムズ・ジョイスです。『若き芸術家の肖像』の主人公をステイーブン・ディーダラスとしました。最近、新訳決定版が評判の『ユリシーズ』にも同名で登場します。ステイーブンもギリシア語で牛の意味で、豊饒のシンボルであり、『ユリシーズ』では芸術のシンボルとされています。『若き芸術家の肖像』第4章に、彼が自分の天職の芸術に目覚めていく感動的な^{タガ}条があります。「自分が名を受けついでいるあの名匠のように、魂の自由と力から、新しい、天翔ける、美しい、触知できぬ、不滅の、生命あるものを、誇らしく創り出そう。」と決意するのです。

「美術館」

苦しみについて彼らは決して間違わなかった
昔の巨匠たちは、人間における苦しみの位置を
何とよく理解していたことか、他の誰かが物を食べ
たり
窓を開けたり、ただのろのろ歩いたりしている時も
それが起るものだという。老人達がうやうや
しく
一心に奇蹟の誕生を待つ時も、それをとくに願わず
森のはずれの池でスケートをしている
子供たちがいるにちがいないことを。
恐ろしい殉教でさえ、とにかく片隅で
犬が犬の生活をし、刑吏の馬が罪知らぬ尻を

木にこすりつけている乱雑な場所で
進行していくということを。

たとえばブリューゲルの「イカロス」の絵。すべて
が
何とのんびりとあの災厄からそっぽを向いていること
か。農夫は
水音と絶望の叫びを聞いたかも知れない、
しかし彼にはそれが重大な失敗ではなかった。太陽
はいつものように
輝いて、碧い海中に消えていく白い両脚を照らした。
そして何か驚くべきもの、少年が空から落ちてくる
のを
見たに違いない豪華優美な船も
どこか目的地があって、静かに航海を続けた。

重要な意義深い出来事も日常普通の世界の一隅で起こる出来事にすぎないのです。救世主として受難の苦しみをうけねばならないキリストが生れるときも、神ならぬ人間の子イカロスが、人智を尽くした翼で空を飛んで墜落した悲劇も、世の人々の注目を集めたわけではありません。それが世の常なのです。オーデンが着目した、ブリューゲルのこの「重要な事件と民衆の日常的な営みとの同化^②」は彼の他の作品の幾つかにも見られ、例えば、『ベツレヘムの人口調査』の中に、人口調査の登録とそれに伴う徴税に、黙々と従っている多くの人々が描かれています。身重のマリアとヨセフの姿もあまり目立たず、マリアであることを示す青いマントでやっとなんと分るのです。ヨセフとマリアもこの多くの人々の中の二人に過ぎないのです。この詩「美術館」は口語的な表現で、各行の音節数もまちまちですが、行末に韻をふんでいて、詩としてのひきしまった効果が出ています。以上オーデンが絵から触発されて書いた詩を紹介しました。

II 「アキレスの盾」

次に芸術家と時代について考えさせる詩「アキレスの盾」を読みましょう。

「アキレスの盾」

彼女は彼の肩ごしにのぞいた、
葡萄やオリーブの木があるか、

大理石の、立派に治められた都市、
荒海をゆく船はあるか、と。
だがその輝く金属の面に
彼の手が代りに描いたのは
人間のつくりだした荒野と
鉛のような空。

目立つもののないむきだしの褐色の平原、
ひとすじの草も、隣人の気配もなく、
食えるもの、腰を下ろすところもない、
だがその空虚を埋めて集まっているのは、
正体のわからぬ群衆、
ずらりと並んだ百万の目、百万の軍靴、
無表情に合図を待ちながら。

虚空から顔のない声が
統計によってある目的が正しいことを立証した、
その調子はこの土地と同じように平板無味。
誰一人喝采されず何一つ議論されず、
一列また一列雲のような砂塵をあげて
一つの信念に耐えながら行進し去った
その論理がどこかよそへ、歎きへと彼等を導いた。

彼女は彼の肩ごしにのぞいた
敬虔な儀式はないか、
花輪で飾られた白い牝牛
献酒や犠牲は、と。
だがその輝く金属の面に
あるべき祭壇はなく
彼女がちらつく鍛冶の火影に見たのは
全く別の場面だった。

有刺鉄線が任意の場所を囲み
退屈した役人がそこをぶらつき（一人は駄洒落を
とばす）
見張は昼の暑さで汗をかいた。
普通のきちんとした人々が
囲いの外からじっと見て動かず物も言わなかった
青ざめた三人が引き立てられ
地面に突立つ三本の柱に縛られた時。

この世で権勢のある大衆、

影響力あり、常に同じ重みのある人は皆
他の人々の掌中にあった、かの人らは数少なく
助けを望み得ず、いかなる助けも来なかった。
敵のしたい放題のことがなされ極悪人の
望みうるかぎりの辱しめをうけ、誇りを失って
肉体が死ぬ前に人間として死んでいた。

彼女は彼の肩ごしにのぞいた
試合をする競技者はいないか、
舞踊する男女が美事な四肢を
音楽に合わせて
早く、早く動かすさまは、と。
だがその輝く盾の上に
彼の手が描いたのは舞踊の広間ではなく
雑草の繁る戦場であった。

ほろを着た悪童が、あてもなくひとりきり
何もない処をうろつき、小鳥が一羽
狙いましたその石を無事逃れて飛び去った。
娘は犯されるもの、二人寄れば三人目を刺すとい
うのは
彼には自明の理だった、約束が守られ、
人が泣くので共に泣く世界など、
聞いたこともなかったその子には。

うすい唇の武器師へパイストスは
びっこを引いて立去った。
乳房輝くテティスは
落胆して声をあげて泣いた
わが子、強く冷酷で人をうち斃すアキレス
長く生きることのないその子を
悦ばすためにかの神の仕上げた
ものを見たときに。

この詩はギリシアの叙事詩人ホメロスの『イーリアス』に基づいています。トロヤ戦争でギリシア方の英雄アキレスは、総大将アガメムノンの仕打に怒って戦に出ることを拒みます。敗色濃いギリシア軍の有様に、友人パトロクラスは、自分がアキレスだと敵方に思わせる為、彼の武具を借りて出陣し、戦死してしまいます。親友の死に立上ったアキレスのために、母テティスが鍛冶の神へパイストスに頼んで、武具を作って貰います。ホメロス

の『イーリアス』では、へパイストスはその技を十分に発揮したことになっていて、盾にもさまざまな場面を描き出します。

第1圏 (中央の円形部) 大地と大空と海原、太陽、月、星座

第2圏 都市1. 婚礼の宴、広場の裁判
2. 城攻めの攻防

第3圏 農耕、葡萄の収穫

第4圏 牧場、ライオンの襲撃、若者の踊り

第5圏 オーケアノス (極洋) の流れ

へパイストスが作業するところを、テティスが見ている場面を描いたフランスの銅版画がありますから、これはテーマとしてよく知られているようです。

オーデンはこのテーマを取り上げて、読者の目を古代ギリシアから現代へと向けさせます。あるいはこう考えてもよいかも知れません——オーデンはあの大詩人ホメロスの向こうを張って、現代の芸術家ならこんなものを彫り込むだろう、と考えられるものを描いたのだ——と。それは古典世界の風物、営為ではなく、現代の「荒地」^④でした。テティスは三度期待の目を走らせ、三度期待を裏切られます。

詩形もそれに応じています。最初の3連と次の3連は同じ構成で、テティスが目を上げると、その期待は裏切られて、恐ろしい、または不気味な場面が彫られています。最後の3連ではその構成が破られ、情景は2連だけで終わります。それはテティスの慟哭で切れてしまうのです。そしてその後に締め括りの連が来ます。見事な構成です。

構成もさることながら、現代の「荒地」の描写はどうでしょう。「空から顔のない声が」軍隊に前進を命じ、キリストを連想させる処刑の場が描かれ、大人のいなくなった後の、子供の心の荒廃まで読んでくると、思わずぎくりとしてしまいます。二次大戦とその戦後の、どこかで起っただろうようなことなのです。

III 「ノーフォーク」

今日取り上げたもう一人の詩人はジョン・ベッチマンですが、まず何故ベッチマンを読むようになったかをお話しせねばなりません。四年前、研究会の仲間とオーデンの「不安の時代」を翻訳して、国文社から出版しました。その時「不安の時代」がジョン・ベッチマンに捧げられていることを知ったのです。日本ではあまり知られ

ていなかった人で、私も学生時代にラジオで、成田成寿氏が新人として紹介しているのを聞いたぐらいでした。オーデンが自作の詩を献呈する程、親しいか、敬意を抱いている人に違いない、というので調べはじめたのがきっかけでした。

ベッチマンの詩集が商業的にも成功で、テレビのキャスターであり、建築、特にビクトリア朝教会建築の権威であったが、最も愛されたのは詩人としてであったといわれています。彼は1906年8月28日ロンドンで生れ、オーデンより1才年上ですが、二人が会おうオックスフォードには同じ1925年に入っています。ベッチマンはモードレン学寮、オーデンはクライスト・チャーチ学寮でした。知り合った二人は、互に相手が詩に興味を抱いていることを知り、やがて相手の作品のよさを認め合ったのです。後年オーデンはアメリカに渡り、市民権をとりませんが、アメリカでベッチマンの詩選集を *Slick But Not Streamlined* と名付けて出版します。そして「自分が書きたかった詩がたくさんある。」と言っています。そういうと二人の資質が似ているような感じを受けますが、オーデンとベッチマンはその詩がむしろ対照的なのです。

オーデンは大変行動的で、大学卒業後ベルリンに行き、ドイツ語の勉強をしながら、やがてナチズムに覆われることになるドイツを目のあたりにする。1936年には友人、教え子と共にアイスランドを旅行、1937年スペイン内乱で共和国軍のために働く。更に中国へ行き日中戦争を見、合衆国経由で帰国、同年後半をブリュッセルに住む。1939年アメリカへ移住。生活の資を得るためにあちこちし、その旅から作品が生れ、そしてナチズムと Kommunismus の間を揺れ動いたようです。彼の初期の詩に“Wanderer”というアングロ・サクソン詩を模した作品がありますが、彼の一生はまさに wanderer (さすらい人) であったといえます。その眼は未来へ向けられていたといえそうです。

一方ベッチマンは職業のために住む所を変えてはいますが、国外といえばアイルランドに2年だけで、あとは国内の生活でした。しかしその住んだところ、よく行った所は細かく観察していて、作品に反映させます。彼の作品に何と沢山の地名が出てくることか。それ等の作品を読む時、地図を調べ、その土地、その地方のことを事典、ガイドブックなどで調べることが、その作品の理解、鑑賞に欠かせません。それは一般に作品を読むのに当然のことのようですが、ベッチマンの作品は特にその必要

性が大きいのです。地方の植物の名もよく出てきます。彼の詩の地誌的傾向といえるでしょう。更に彼の詩には、現在よりは過去のもの、特にビクトリア朝のものをなつかしみ、尊ぶ傾向があります。それを念頭において読まないと十分な理解ができない詩が沢山あります。オーデンの未来を見る目と対照的に、ベッチマンの目は過去を振り返って見るのです。

「ノーフォーク」

悪魔はどうやって来たのか？

初めて襲ったのはいつだったのか？

このノーフォークの径は失われてしまった無垢を呼び戻してくれる。

歳月は抜け落ちて、私はまたこの同じ小道を杖を引いて、木の柵沿いに歩いている。

ここで40年前

父が穏かにゆっくりと、私の後から歩いていたのだった。

私はよくギシギシの実を手一杯にして

踏み段の上から父に浴びせかけたものだ、

トネリコとハンノキの木陰の

この退屈な数マイルを父に急がせたくて

私たちの停泊地とマストの先が見えてくる、このあたりまで

父のツイードの服に顔をつけて押したものだ。

そこで、ランタンの明かりで夕食の後

キャビンでぬくぬくと気楽に横になり

夜、草の繁るビュア川がつかややかな船腹にあたってチャブチャブと立てる音、

ノーフォークの囁く水の音が、あたりの月に映える葦のことを告げるのを聴いていた。

悪魔はどうやって来たのか？

初めて襲ったのはいつだったのか？

今私はラウスのファウラーが修復したと知っているが、

教会はその頃と全く同じだ。時よ、返して下さい、ずっと前の

至福の無知を、数々の守られない約束と、傷ついた心の

恐ろしい疎隔の始まる前の安息を。

ベッチマンの詩の多くは多少とも皮肉なところがあります。痛烈なものもあり、対象を愛情こめて見守りながら、一寸皮肉をきかせたものもあります。言葉通りのように見えながら、実は皮肉っている詩もあります。

しかしこの「ノーフォーク」は、彼には珍しく皮肉の響きがありません。今はこの世にない父との40年前のヨット遊びの思い出、天真爛漫な年頃の子と、優しい父との交情は、まっすぐに入ってきてわれわれの心を打ちます。ベッチマンが書いた *Summoned by Bells* という自叙伝的な長詩があります。無韻詩という、弱強調5詩脚で韻をふまない詩形で書かれています。シェイクスピアがその戯曲をこの詩形で書いています。リズムカルで文構成の柔軟性もあり、ロマン派の詩人達も試みていますし、現代では T. S. エリオットが詩劇に使っています。ベッチマンは10才の時小学校で T. S. エリオットに教わっていて、ずっとエリオットに好意を抱いていました。詩を書くようになってから、先輩として詩作の上でも做うところがありました。この *Summoned by Bells* の詩形もエリオットの詩劇にヒントを得たかも知れません。

Summoned by Bells その他の資料によると、ベッチマンは早くから詩人になりたいと思っていたが、父は家業を継がせたいと考えていました。工場を持ち、多くの従業員をかかえて、贅沢な家具、調度を製作していて、その創意による製品はロンドンの流行となったといわれます。ところがベッチマンに家業をつぐ気はなくて、父と子の確執が始まります。「悪魔」がやってきて「攻撃」をはじめたのです。ヨット遊びを楽しんだ頃のノーフォークの教会は、傷んだが修復され、以前と同じ姿を見せているのに、父と子の間は不和のまま。「時よ、取り戻して下さい」という願いは、ディラン・トマスの“*Fern Hill*”「羊歯が丘」を思い起させます。トマスも幼い頃伯母の農場で遊んだ頃の、二度と帰らぬ無垢を懐かしんでうたっています。ベッチマンは1940年に出した詩集に“*On a Portrait of a Deaf Man*”という詩を書いて、耳の遠かった父の老残のさまをうたっています。小さい時自分をいつくしんでくれた父をつき離して書いているのです。「ノーフォーク」はそれを悔いて書いたといわれています。そして、しみじみとしたよい詩になりました。

IV 「重役」

最後にベッチマンの皮肉屋としての才能がよく出ている作品を紹介します。

「重役」

私は若い重役です。私のほどきれいな袖口はありません。

私はスリムラインのブリーフケースを持っていて、会社のコルチナ^⑤を使っています。

ここからバージェス・ヒルまで道々の飲み屋でボーイ長はみんな私をよく知っていて、つけにくれます。

私の仕事は何かとお尋ねですか。実はね、ひとつには渉外係ひとつには広報役なのです。実は私は今の輸出業務推進のまとめをやっている基本的には10時から5時まで執務できます。

肝心なオフレコの仕事に関しては—これは輸送に関する話ですが—

私は深紅色のアストン・マーチン^⑥を持っています—走るかって？飛びますよ。

歩行者と犬と猫—私たちはそれらを標的にして突走ります。

私はまた水面についたことのない高速モーターボートを持っています。

勿論グラスファイバー製です。私の知っていた鳥の名をとって「マンディ・ジェイン」と呼んでいます—ソーダ水なしでストレートをください。

で、どうやって手に入れたかというんですか？ それをお話して

あなたに写真に入ってもらうのに私は別の帽子をかぶらなくちゃ。

私は穏かな開発を少しやっています。私が必要とするような場所は

ちょっと寂れた、静かな田舎の市の立つ町です。

午餐、一二度の酒、少しの機転で、私は開発計画官、町役場書記、市長を抱き込んでいます。

そしてだれか保存主義者が邪魔しようとする
自治都市の技師からの『危険建築物』という警告が
私たちの前に立ちはだかるどんな建物でも解決しま
す。

現代的様式が、あなた、ちゃんと実際に、確固とし
た地位を得てきているんです。

ある会社の重役が顧客相手に自分の仕事や遊びの話し
をする、という体裁をとった詩です。自分の手腕家ぶり、
贅沢ぶりをひけらかし、高級な車とモーターボートの自
慢をしています。スリムラインは調べがつかないのです
が、恐らくブランド名でしょう。会社の車もヒット商品、
身なりもきちんとしていて、つけの顔がきくのです。

高級車で走る時、高速で突走って、スピードの楽しみ
の為に歩行者も犬も猫も一緒くた、轢き殺すのも辞さ
ない一むこうがあわてて避けるのでしょう。そういう非
人間的なところがあります。モーターボートも高性能で、
水面につかない位高速が出る、グラスファイバー製（グ
ラスファイバーも出初めの頃は大変高価であった筈）で
す。相手と写真をとるにも、わざわざ帽子を変える程お
しゃれです。袖口が誰よりきれいという気の使いよう。
開発の話題がでてきます。日本の地上げのような荒っぽ
いやり方でなく、役所の方に手を回して「穏やか」に事
を進めていく手合いなのです。

この人物の物の言い方、言葉使いが何とも気障です。
そしてこういう人物によって進められる「穏やかな」開
発と読んできますと、保存主義者ベッチマンがこの詩を
書いた気持ちが、ある程度分るような気がします。

この詩の中で使われている‘liaison man’、‘viable’、
‘development’、‘P.R.O.’、‘executive’などは、うさんくさ
いと感じていた語句だったということです。⑦それを使っ
て詩中の人物をより一層皮肉っているわけです。確かに
私達も新しく使われ出した言葉の中で、あまり好きにな
れない語句があり、使わないようにするということがあ
ります。はっきりとした理由のある場合もあり、何となく
気に入らないという場合もあります。外国語の場合その
感じはつかみ難いものです。辞典で分るのはよいので
すが、分らないものが多いのです。上述の語句のうち
‘viable’はO.E.D.に「最近の用法では、特に、働くことの
できる、実行できる、特に経済的または財政的に」とあ
って1955年からの例が出ています。この詩の書かれた頃
でもまだ新語だったのです。しかし語のニュアンスは分

りません。‘development’が出てきますが、「開発する」と
いう意味での develop の初例は1901年で‘what is called’
（いわゆる）といい添えてあり、それぞれ1931年、1932
年の第2、3例には‘ ’をつけています。まだあまり馴染
みのない語だったのです。‘executive’の初例は1902年、第
2例以下、1927、30、30、…となっていて、1930年前後
からだんだん使われるようになったことが分ります。し
かし辞書で分るのはそこまでです。諷刺とか、笑いが難
しい理由の一つがそれなのです。ベッチマンが日本であ
まり読まれなかったということと関係があるように思わ
れます。

オーデンは1973年ウィーンでなくなりませんが、1974年、
ウェストミンスター寺院の詩人コーナーに記念碑がつく
られ、10月にベッチマンが碑の除幕式を司っています。⑧

ベッチマンは1972-84年桂冠詩人を務め、1984年にな
くなりません。昨年1996年11月詩人コーナーに祀られまし
た。こうして詩の先輩と仰いできた T. S. エリオット、
友人オーデンと詩人コーナーで一緒になったのです。

御静聴有難うございました。

註

1. 森のはずれでスケートをする少年たちの絵も、ブ
リュージェルは描いている。
 2. 小学館『世界美術大事典 5』
 3. 呉茂一訳『イーリアス』 筑摩書房
 4. *The Waste Land* T. S. エリオットの代表作品で、
一次大戦後の混乱した社会を描く。そこから荒廃し
た社会をエリオットにならって「荒地」と呼ぶ。
 5. 英国のフォードモーター社製の乗用車。1962年発表
され、ヒット商品となる。
 6. 英国アストン・マーチン・ラゴンダ社製高級パーソ
ナルカー。
 7. Bevis Hillier, *Young Betjeman*, John Murray,
1988.
 8. 橋口稔『詩人オーデン』平凡社、1996.
- なおブリュージェルの絵については
美術出版社刊
世界の巨匠シリーズ『ブリュージェル』第7版を参考
にした。

（これは1997年1月22日定年退職記念講演会で話した原
稿に手を入れたものである。）